



「笹川杯作文コンクール 2011」～中国語で応募～ 第6回優秀賞作品

「もののあはれ」

山東省 呂盼

日本人は美しいもの、特に“もののあはれ”の美しさを好む。日本列島は優美で心地よい自然の風土に恵まれているが、資源は相対的に乏しく災害も多いため、日本人には哀悼を尊ぶ気質が形成された。

“もののあはれ”は悲哀、悲しさ、悲慘さと解釈されるだけでなく、哀れみ、同情、感動、さびといった意味も持っている。“もののあはれ”は感覚的な美であって、知性や理性で判断されるものではなく、直感や心で感じ取るものであり、心でしか感じ取れない美しさなのである。

自然災害が頻発する小さな島国は、日本人に個体の矮小さを深く感じさせた。生命の無常と短さは、桜のようであり、最も美しい時が世を去る間際の時なのである。日本最古の歌集『万葉集』では大部分の歌が繊細な感情で詠まれており、悲しみや恨みに満ちている。この中に「秋づけば、尾花が上に置く露の、消ぬべくも、我は思ほゆるかも」と詠まれた一首があるが、この歌の中で作者は露の宿命に人生の無常をたとえ、自らの悲しみと憂いを託している。

いわゆる“もののあはれ”とは、懸念に対する解答のひとつでもあって、日本に対する理解はいつも懸念から始まり、懸念は物語の出発点である。人は疑問を持つと、往々にして遡及していくものなのだが、追えば追うほど、最終的には一定の懸念が生まれてしまうのである。日本では風に舞う桜の花は、もののあはれの心をとともよく表しているものである。桜は美しいが、美しい時期は長くはなく、一般的に一株の桜の花は咲き始めてから三、五日程度の寿命しかない。人々は満開の桜を愛で、解き放たれた青春を味わうと同時に、花が乱れ散る瞬間には、風に舞い落ちる花吹雪の中に生命の脆さと青春の短さを感じ取り、より深い趣を感じるのである。

日本人は、古来、自然を愛し人為的なものを嫌うが、これは日本人独特の美的感覚である。日本人は抽象的な表現能力に欠けるため、具体的で直感的な表象にますます関心を払うようになる。自然を感じ取るというのは、もちろん単に自然を観察するというだけではなく、自然物の心に入り込むことであって、真の万物が個人の魂の力を借りて情緒として表れてくるが、その背後には思想や道理が隠されているのである。

もののあはれとは、哀しく荒んだ心境から生み出される悲劇の美であり、憂鬱の美である。生命に対する哀れみであり、歳月の無常に対する感傷である。これは日本の伝統文化の核心的な部分であり、日本文学の一大特色でもある。

日本の伝統文化には婉曲的で含蓄のある悲しみや気高い感情の悲壮さがあり、こうした点は『平家物語』、『源氏物語』の中に見ることができる。『源氏物語』から敷衍し形成された“もののあはれ”という日本的な美学名詞は、当然、日本民族の思考法の特徴を最もよく表しているといえる。

“もののあはれ”は表象と感情の結合点となり、日本文学の伝統的な審美観念の核心となっている。

日本の芸術の美を最も理解する民族とは、世界中で恐らく漢民族だけだろう。茅盾は、「1920～30年代の中国は多くの優れた作家を輩出したが、彼らと日本留学の経験とは大いに関係がある。」と述べている。多くの中国の作家が日本文化を熱愛するのは、内心から発することである。郁達夫は、日本の文芸美の特徴について次のように語っている。日本の文芸は「希薄さの中に独特の趣を出し、簡単さの中に深い意義を込めている」と。それは「空中のそよ風、池のさざ波のように、始まりも終わりも分からず、飄々としなやかなものである。ごく短い言葉でも、よく反芻すると、長い年月を経てもオリブのように噛めば噛むほど深い味わいがある」というのだ。戴季陶は、「日本の山水は、全て、静かな趣があって精緻で、工夫を凝らした見事な彫刻のようである。こうした明媚な風光は、当然その国民の美的感覚を養うものである。」と言っている。

“もののあはれ”という審美の観念は、心にあるインスピレーションが感じ取るところを表すものであり、主に“一瞬の美”を強調している。それは、瞬く間に過ぎ去る瞬間の感銘の一つであり、その時に生じる微妙な情緒なのである。自分の心が感じ取るところを重視する日本人にとって、現実の物は単なるモノに過ぎず、特殊な環境の下で表れる美しい瞬間こそが永遠なのである。

もののあはれ意識は、日本人の感情の世界に浸透していて、日本人の生活様式に影響し、この民族の心理的遺伝子の一部となっており、ここから道理を受け入れない極めて壮烈な行為が派生してくる—

山口百恵は、芸能人として最も光り輝き最も華やかな時期に決然と引退したし、芥川龍之介、太宰治、三島由紀夫は、文学の最高峰を創作した時に自殺した。武宮正樹、大竹英雄などの棋士は、対局中に全軍が壊滅したとしても、“美しい指し方”を放棄しようとはしなかった…

日本では津々浦々に“伊豆の踊子”像があるが、本物の“伊豆の踊子”（1990年代の初めまで生存とのこと）は、終生その姿を現さなかった。これは、彼女が人々の心にある踊り子のイメージを自らの老いた姿により損なうことを危惧したためである。

“もののあはれ”の薫陶は、日本人の精神世界を変えた。もののあはれ意識は、日本で生まれたものであり、島国の特殊な地理的環境と非常に大きな関係がある。日本列島は、古来、霧に覆われることが多く、自然の風光が与える印象は、朦朧として移ろいやすいものである。雪山、砂浜、谷川、峡谷、温泉、滝、青々と茂る林、錦のような花々、橋がかかる小川、静かで趣のある庭園—これほど多くの美景が狭い地域に集中している国は、世界の中でも日本だけだろう。噴火、地震、大雪、津波、台風、戦乱—これほど多くの自然災害が日本のように古来頻発してきた国もない。長年に亘って日本人がいつも見てきた美しさは、東の間のものであり、烏有に帰すものなのである。そうした全てのことから、素晴らしい事物は不安定なものであると、彼らは信じるようになったのである。そして仏教の伝来により、日本人はそうした認識をさらに強くしたのである。

日本人の国民性の特徴として、彼らが残月やほころび始めた蕾や散る花びらをより深く愛するのは、そうしたものの中に哀れみを誘う情緒が潜んでいて、そのことで美感が増すと考えるからなのである。その無常の哀しさと美しさこそ、まさに日本人の“もののあはれ”の真髄なのである。

“もののあはれ”は死生観の一つでもある。その主体は“一瞬の美”を求め、美しい瞬間に“永遠不変の静寂を求め”ことをいとわない。このため、生命の一瞬の煌めきを追究すること、これがもののあはれの重要な特質なのである。生活の中に浸透しているもののあはれこそ、大地震の悲しみから彼らを解放し、彼らが再び奮起して新しい生活を始める力になれるのかもしれない。